

看護における職業的アイデンティティに関する研究の動向と課題

原 頼子¹⁾, 後閑容子²⁾

要約: 本稿では、看護における職業的アイデンティティ (=同一性) に関する研究の動向と、今後の課題を見いだすことを目的とし、医学中央雑誌および CiNii より文献検索を行い概観した。全検索数のうち、要件を満たした 89 件を抽出し、「理論構築」、「尺度開発」、「発達過程」、「関連要因」、「職業的アイデンティティ確立に向けての方策」に分けて考察した。その結果、理論的枠組み、開発された尺度の特徴、看護学生・看護職の発達過程、職業的アイデンティティに影響を及ぼす要因について把握することができた。また、さらなる理論構築の発展や因子構造の解明、時代に対応した尺度開発の必要性、職業的アイデンティティ形成を促進させるための方策などに関する新たな知見の蓄積が必要であることが示唆された。

キーワード: 看護, 職業的アイデンティティ, 職業的同一性

I. 緒 言

アイデンティティとは Erikson (1973) が提唱した概念であり、「自我同一性」と訳され、彼はこれを、「自我が特定の社会的現実の枠組みの中で定義されている自我へと発達しつつあるという確信である」と述べている。つまり、「私は何々である」という自己確信であり、この自己確信には、自己意識の連続性、自分が自分であること、自分の性格・目標・使命などをはっきりと捉え、それらを自分で動かしているという実感が伴うとされている。したがって、職業的アイデンティティとは、職業人として自分はどのように仕事とかかわっていくのか、職業を通して自分らしさをいかに育んでいくのかという社会に対する公的な自己定義といわれている (秋元, 2011)。

現代の看護職には、少子高齢化を踏まえた医療の高度化、療養の場や国民のニーズの多様化といった変化に的確に対応しうる資質・能力の向上がいっそう求められている (厚労省, 2009)。

岩井ら (2001) は、看護職の職業的アイデンティティに関する知識を蓄積することは、看護実践の改善にとって不可欠であると、またグレッグ

(2002) は、個々の看護師が職業的アイデンティティを確立することは看護の質を向上させるひとつの方法であると述べている。

看護における職業的アイデンティティに関する研究は、看護の専門分化 (関根ら, 2006) や新人看護師の早期離職問題 (竹内, 2008) を背景にさまざまな視点から行われている。過去の看護における職業的アイデンティティについての文献については、関根ら (2006) が分析しているが、ここでは抽出した文献の内容を分類・整理することが中心となっており、詳細な内容が示されていない部分も多い。

以上のことから本論では、看護における職業的アイデンティティに関する研究について概観・考察し、今後の課題を見いだすことを目的とする。

II. 方 法

1. データベース

- (1) 医学中央雑誌 Web 版 Ver. 5 (以下、医中誌)
- (2) CiNii

2. 検索期間

¹⁾岐阜大学大学院医学系研究科看護学専攻 ²⁾岐阜大学医学部看護学科

表1 職業的アイデンティティの操作的定義

研究者	定義
松下ら(1993)	社会的現実や自分の能力・適性をふまえたうえで、自分に向いた生きがいのある職業を選びつつあるという感覚
グレッグ(2000)	職業との自己一体意識
下方ら(2004)	職業についての自己への位置づけ
新谷ら(2006)	自分にとって仕事とは何なのか、社会の中で仕事を通じて自分はどのようにありたいかなどの主体的意識や感覚
池田ら(2009)	職業領域における自分らしさの感覚
竹下ら(2010)	職業人として自己をどのように決定し、どのように維持していくかを時間軸の中で意識的・無意識的に操作し、社会に適応しながら自己の職業における存在感覚を獲得するもの

各データベースが検索可能な期間から 2011 年 7 月までとした。

医中誌：1989 年～2011 年 7 月

CiNii：1993 年～2011 年 7 月

3. 検索用語

検索用語は、「看護」と「職業的アイデンティティ」および、「職業的同一性」とした。

4. 文献整理と抽出要件

原著論文、または目的、方法、結果、考察が述べられている総説を整理、抽出した。抽出した文献を吟味し、対象別や内容別に考察した。

III. 結果および考察

医中誌および CiNii で検索した結果、文献は 111 件で、そのうち抽出要件にあった文献は 89 件であった。文献の内容を吟味し、最終的に以下の 5 つのカテゴリーに分けることができた。

1. 理論構築
2. 尺度開発
3. 職業的アイデンティティとその発達過程
4. 職業的アイデンティティとの関連要因
5. 職業的アイデンティティ確立に向けての方策

1. 理論構築

1) 用語の定義

抽出した文献において用いられたいくつかの職業的アイデンティティの定義について表 1 に示す。

アイデンティティとは、本来訳しにくい多義的な用語（秋本，2011）であるため、Erikson 以来、研究者らは、先行研究をふまえたうえで、自分なりの解釈として操作的定義をおき、研究を進めている。表 1 をみると、どの研究者にも共通または類似した意味の語彙が見いだせる。「職業」「社会」「自己」「主体的」「主観的」「意識・感覚」な

どがそれである。これらから、職業的アイデンティティとは、職業（社会における職業）における主体的な自己の存在感覚（意識）と表すことができよう。

2) 概念枠組み

グレッグは、看護師の職業的アイデンティティの理論化を試みている（2002）。はじめに先行研究から実証的研究をまとめた構造モデル（図 1）を作成し、理論構築の必要性を明らかにしたうえで、帰納的方法により看護師が職業的アイデンティティを確立するプロセスを説明するための、初期の領域密着型中範囲理論として提唱している。これには、看護師が職業的アイデンティティを確立するために経験するプロセスが示されている。看護師は、「教育からの影響」を強く受け、人との出会いや「仕事の経験」から「看護の価値を認識」し、「看護観を確立」していく。この過程を進む中で看護師は、「自己の看護実践を承認」し、それによって「看護へのコミットメント」を強め、「自己と看護師の統合」に近づいていく。また、この 7 段階は「看護とのきずな」の最終段階へ螺旋状に向かっていく。看護における職業的アイデンティティに関する概念を理論として構築しようと試みた研究者はグレッグのみであり、グレッグの提唱は、24 件の研究の根拠や結果の考察で用いられている。対象の職業的アイデンティティを構造化、概念化したとき、それを既存の理論と結びつける作業が必要となってくる。看護師が職業的アイデンティティを確立するプロセスというひとつの現象を記述した中範囲理論としてのこの構造モデルは、今後も看護師の職業的アイデンティティ研究に根付き、発展していくものと思われる。

また、理論構築とは目的を異にするが、尺度開発の研究では、その前提として、職業的アイデン

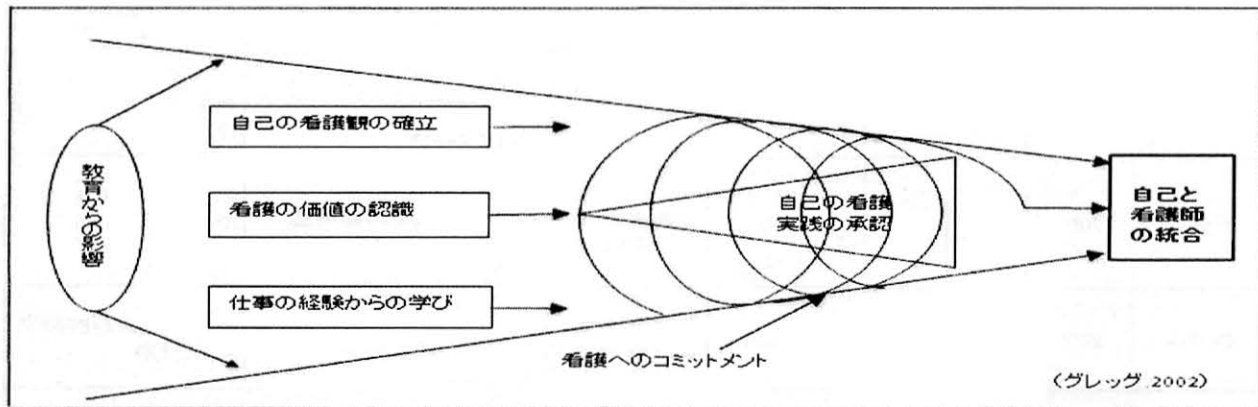


図1構造モデル: 看護とのきずな II

ティティを構成する下位尺度として概念化している。これについては、尺度開発の概要(表2)を参照されたい。さらに、質的研究においては、半構成インタビューやフォーカスグループインタビューから対象の職業的アイデンティティを概念化・構造化している研究が8件みられた。例えば、梶谷(2004)は、中堅看護師のアイデンティティを自己像という側面から捉え、その影響要因をインタビューから抽出している。その他、助産師(小泉2010)、がん看護(名越ら、2005)、衛生看護科5年生(上田ら、2010)など限定された対象のアイデンティティを探るために構造化が試みられている。

2. 尺度開発

1) 職業的アイデンティティ尺度

尺度開発は、対象の職業的アイデンティティを数値化し、測定できるようにする試みであり、測定結果は、職業的アイデンティティの確立にむけて、その教育的示唆を得たり、方策に対する効果の判定に用いることができる。これに関する文献は、波多野ら(1993)、岩井ら(2001)、佐々木ら(2006)、藤井ら(2002)、根岸ら(2010)の5件であった。これらの尺度の概略と特徴を表2にまとめた。

今回抽出した文献では、波多野らの尺度を用いたものが11件、藤井らの尺度を用いたものが11件であった。次いで佐々木ら、岩井らが2件ずつであった。その他にも、教育学系で用いられる尺度を利用するものや、抽出文献以外で独自の尺度を用いたものがあった。表2をみると、開発のための対象母集団の数の問題、対象選定条件の問題、研究方法においても限界があり、一般化には尺度

のさらなる精練が必要である。しかし、今後もこれらの尺度は看護における職業的アイデンティティの計測用具として繰り返し使用されることによって、より高い信頼性・妥当性が確立していくものと考ええる。一方、これらの尺度は、調査対象者が共通していないため、測定の際には、対象の特徴にあった尺度を選択する必要がある。表2からもわかるように、既存の尺度は、その生成過程における対象者は、それぞれ学生、一般の臨床看護師、看護教員、行政保健師となっている。仮に、調査対象者が、在宅医療に関わる訪問看護師や、臓器移植コーディネーターなどの場合、これらの尺度をそのまま利用しても、得られたデータの信頼性の低下は否めない。アイデンティティがEriksonによる「特定の社会的現実の枠組みの中で定義されている自我」であるならば、看護を取り巻く社会情勢の変化は、おのずと看護師の職業的アイデンティティへも影響してくるはずである。たとえば波多野ら(1993)の尺度開発からは20年近く経過しており、時代に対応した尺度開発は常に求められる。今後はあらゆる領域に対応できる尺度開発や尺度の更新といった作業が必要となってくる。

2) 職業的同一性地位テスト

Marcia(1966)は4つの同一性地位を用いて、青年期にある人のアイデンティティを査定する方策を開発した。アイデンティティを4つの様相(地位)として捉え、それは、同一性達成、モラトリアム、早期完了、および同一性拡散といわれる。同一性達成とは、危機を体験し、イデオロギーと職業に就いて安定したコミットメントを保持している状態を言い、モラトリアムとは、危機の状態

表2 看護職における職業的アイデンティティの各尺度の概要

研究者	開発年	母数	方法	因子の由来	下位尺度	特徴
波多野ら	1993	940	横断	既存研究	①職業人としての自己向上 ②職業人としての自尊感情 ③職業的自己関与 ④職業への肯定的イメージ	学生から臨床看護師 共通に用いることが できる
岩井ら	2001	182	横断	仮説尺度	①看護職の職業選択の誇り ②看護技術への自負 ③患者に貢献する職業としての連帯感 ④学問に貢献する職業としての認知 ⑤患者に必要とされる存在としての認知	学生から看護教員ま でのあらゆる看護職 に対応
藤井ら	2002	466	横断	Erikson	①医療職の選択と成長への自信 ②医療職観の確立 ③医療現場で必要とされることへの自負 ④社会への貢献の志向	他領域も含む医療系 学生対象
佐々木ら	2006	252	横断	Erikson	①斉一性 ②連続性 ③自己信頼自尊感情 ④適応感	5年目以上の臨床看 護師対象
根岸ら	2010	700	横断	佐々木ら 波多野ら	①保健師としての自信 ②職業と自己の生活の同一化 ③他者からの評価と自己尊重 ④職業への適応と確信	行政保健師対象

にあり、積極的に選択肢を探し求めている状態を言う。さらに早期完了とは、危機を体験することなくコミットメントしている場合で、同一性拡散とは、イデオロギーと職業の両方についてコミットメントしておらず、またコミットメントをしようとする努力もしていない状態を言う(グレッグ, 2000)。松下ら(1993)はこの理論に基づき、看護学生用の職業的同一性地位テストを作成した。これは、職業的アイデンティティ尺度とともに、対象者の職業的アイデンティティの様相を捉える測定用具として用いられており本稿でも3件の研究で使用されていた。

いずれにしても、職業的アイデンティティ尺度、職業的同一性地位テストといった計測用具は、時代に応じて今後も検証され続けるべきである。

3. 職業アイデンティティとその発達過程

看護学生の職業的アイデンティティを学年別にみた研究では1年時に最も高く、2年生で大きく低下し、卒業直前に再び高くなる(波多野ら, 1993; 安藤ら, 1993; 土屋, 2005; 小藪ら, 2007)という一致した見解がみられる。松下ら(1993)も入学初年度の方が職業的同一性の達成感が高く、入学後看護についての専門教育が本格的に始まるに伴って拡散感が高まると述べており、森田ら(1996)の研究では同一性達成に関してのみ同様の結果を報告している。5年一貫課程での縦断的研究でも、学生の職業的アイデンティティは学年進行に伴って低下し、卒業年次に再び上昇する(上

田ら, 2010)と報告されている。3年課程における看護学生の職業的アイデンティティの発達過程はどの研究でもおよそ一致している。課程の違いはあっても、入学時のアイデンティティ得点は高いが実習の開始とともに医療現場の現実と自己の能力の未熟さに気づかされ得点が低下、その後卒業に向けて上昇するという傾向は共通しているようである。これらの文献からは、1990年代から看護基礎教育において中心的な役割を担う4年制の大学生を対象とした知見が見当たらなかった。この点については、言うまでもなくいくつかの一致した知見による見解が求められる。

看護職においては、波多野ら(1993)は、職業的アイデンティティは、就職直後は全体のうちで最低で、その後は徐々に高くなるとしている。さらに、その発達は看護職の現実を知らないロマンティックな職業への憧れへの段階、現実を知って職業への失望の段階、そして、看護職へのアイデンティティを確立し、安定する段階と3つの特徴的な段階をとると報告している。新人看護師は、看護基礎教育を修了した直後であり、その後の臨床で受ける刺激や卒後教育いかんで職業的アイデンティティの様相は異なってくると考える。したがって、新人看護師に焦点を当てた研究は多い。新卒看護師の職業的アイデンティティの発達は十分とはいえず(松下ら, 1998)、1年目から2年目にかけての拡散の高まりについては落合ら(2007)や竹内(2008)も同様の報告をしている。厳しい

職場に就職したという緊張と不安の中にある新人看護師の職業的アイデンティティは、いわば、危機からのスタートとなる。いかに卒後教育が重要であるかが伺われる。

中堅看護師は、5年目で職業的アイデンティティが低下する報告が2件あるが（竹内，2008；落合ら，2007），卒後7～10年は4～6年より低いとの報告もある（和泉ら，2010）。20代後半は仕事も一人前となり，職場での役割も大きくなるが，一方で結婚や子育ての時期と重なり，アイデンティティの揺らぎが生じるのは当然の結果ともいえる。

中間管理者は，「これまでの職業的アイデンティティのゆらぎ」「再構築」「自己実現への取り組み」という過程を通して危機を乗り越えていく。職業的アイデンティティはサイクルとなり，繰り返すことによって発達していく（秦，2004）という報告がある。看護管理職においても，職業的同一性は発達・成熟したり，より下位の同一性地位へ移行したりする可能性があることを示している（大谷，1998）。

これらの報告から，中堅以降の看護師の職業的アイデンティティはあらゆる危機に直面し，「ゆらぎ」，「下位の同一性に移行」ながらも，「再構築」，「サイクルとなって繰り返す」，「発達・成熟」している様が伺えると同時に，この様相はグレッグの中範囲理論に当てはまる部分が多いと考える。

4. 職業的アイデンティティとの関連要因

1) 職業的アイデンティティに影響を及ぼす要因

職業的アイデンティティへの影響要因は多数報告されている。学生と看護師にわけて，概観する。

① 学生（図2）

看護学生の職業的アイデンティティに影響を及ぼす因子は2つに大別することができる。一つは個人的背景からくる因子である。家族背景では，両親の意向（松下ら，1993；安藤ら，1993）や祖父母との同居（安藤ら，1993）などからの影響で，松下らは特に母親からの影響は大きいと報告している。またこの影響は進路選択動機にも関連してくる。看護学生はまだ，保護者の監督下にあり，家族からの影響を受けやすいことは理解できる。

進路選択時期では，まず進路決定の時期が早いものほどアイデンティティ達成が高い（松下ら，

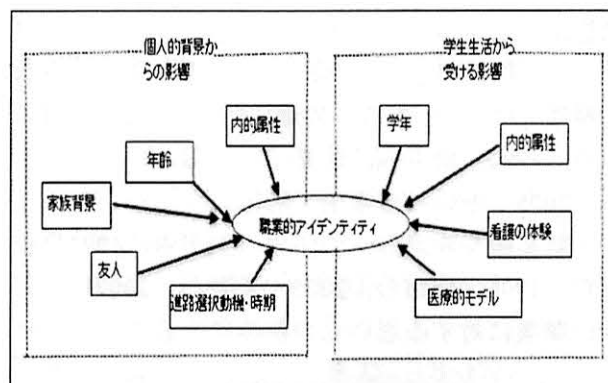


図2: 看護学生の職業的アイデンティティに影響を及ぼした要因

1993；落合ら，2006；本多ら，2006）が，一方では，入学後も進路に迷いが持続している学生も多い（松下ら，1993）との指摘もある。

進路決定が早い学生は，何かのきっかけから，他のものに導かれるのではなく，主体的に「看護師になりたい」という希望を抱くのに対し，進路決定の遅い学生は，選択を迫られてとりあえず保護者の意向に添うなどの消極的な選択へとつながることが考えられる。

選択動機では，本命進路をあきらめて入学したものは医療選択への自信の形成に問題がある可能性を報告したものがある（本多ら，2006）。職業的アイデンティティの形成においては，「自分の決めた道を歩む」ことの重要性が示唆された。

学生生活から受ける影響で，目立ったものは看護の体験である。これは，臨床実習での体験（山内ら，2009；辻田ら，2011）にとどまらず，家族が病気をした時の看護体験（安藤ら，1993）であったり，身近な死の体験（松下ら，1993）で，病者と直接ふれあった経験がアイデンティティ形成促進への大きな要因となっている。

学生個人の内的属性との関連を報告した文献は14件と多かった。個人的背景としての内的属性は，共感性（川守田ら，2003；風岡，2005）や援助規

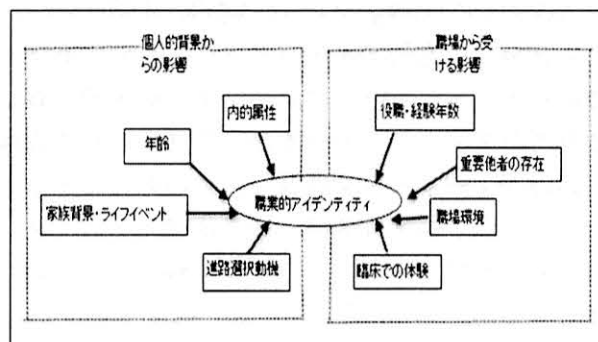


図3: 看護師の職業的アイデンティティに影響を及ぼした要因

範意識（柴田ら，2007），子育て観（上山，2010）などとの関連が報告され，学生生活から受ける内的属性では，学生生活への適応感や興味，評価（松本ら，1990；松下ら，1993；森田ら，1996；野田ら，2005）といった学生生活に対する思いとの関連と職業観や看護師への印象（松下ら，1993；森田ら，1996；野田ら，2005；三野ら，2007）のように職業に対する思いとの関連に大きく分けられた。

② 看護師

看護師は，学生と比べて特徴的なのは，同じ家族背景でも看護師自身が家族の中心的役割であることから，配偶者や子供の有無（柴田，2000；下方ら，2004；根岸ら，2010）が影響していることである。同様に，結婚や出産などのライフイベントや生活満足度が関連してくる（奥山，2007；池田ら，2009）。

また，個人的背景よりも，職場から受ける影響のほうが多く報告され，役職の有無（柴田，2000；梶谷，2004；佐々木ら，2006；根岸ら，2010）・経験年数（柴田ら，2000；岩井ら，2001；根岸ら，2010）をはじめ，看護組織のチーム力，現任教育などの職場環境や対患者関係など臨床での体験があげられる（下方ら，2004；落合ら，2007；池田ら，2009）。さらに重要他者では，学生にとっての家族や友人が，看護師においては，プリセプターなど職場の先輩やサポートしてもらえる同僚（梶谷，2004；山内，2005）にとってかわる。

以上の結果から，職業的アイデンティティに影響を及ぼす要因についての研究は，職業的アイデンティティ形成の促進にむけて，どのような側面からのアプローチが効果的であるかを探求することであり，これらの蓄積は，その方策に結びつくものと考ええる。

2) 職業的アイデンティティが影響を及ぼす要因

看護師の職業的アイデンティティが何に影響するのかということは，この領域での研究の意義を問うことであり，その意義は，看護学教育や看護実践にフィードバックさせるための原点であると考ええる。以下の①～⑤は，職業的アイデンティティが何に影響を及ぼしたと考えられたのかという報告である。

① 看護技術の熟練（増村，1999）

② 患者との相互作用の質（グレッグ，2000）

③ 看護研究活動への取り組み（細田ら，2003）

④ 患者を待たせる場面への看護師の意識（高橋ら，2007）

⑤ 仕事の質の向上行動，職務関与（竹内，2008）

看護技術①は，看護実践における重要な要素である。また④は，看護技術における対患者関係の質であり，②の意味するところに包含されと考える。さらに③は，看護学の発展には不可欠であり，⑤は，個人のみならず，看護集団としての質にも作用する。したがって，これらの文献から，およそ看護師の職業アイデンティティは，看護研究活動，看護実践の質，看護チームの質に影響を及ぼすことを示唆している。

5. 職業的アイデンティティ確立に向けての方策

これまで，抽出した文献から，職業的アイデンティティの発達過程，尺度開発や関連要因について明らかにされていることを述べ，さらに職業的アイデンティティの形成を促進させることが，看護や看護教育の質の向上につながることを示した。では，どのような方策をとれば職業的アイデンティティ形成は促進されるのであろう。次にこの問題に関する研究について述べる。

これによると，学生に対する研究が11件中10件であった。看護基礎教育における臨床実習の持つ役割は重要であり，現状おこなわれている実習の効果を尺度を用いて判定している研究（小野寺ら，1992；大池ら，2002；古宇田ら，2009），また，職業的アイデンティティを高めるであろう方策として，実習直前指導を行い，その効果をみた研究（マイマイティら，2006）がある。茨城県立医療大学では，職業的アイデンティティを育てる授業とはどんな授業か（落合ら，2003）といった積極的取り組みをしており，討論テーマの特徴（落合ら，2010）を見いだしたり，ピアエデュケーション（高木ら，2009），エキスパートモデルによる授業（落合ら，2006）を行い，その効果を報告している。このほか，印象的な文献として，石橋ら（2006）は電子メールでの個別支援により，学生のアイデンティティ形成を支える事例報告や，Yamagishiら（2008）はウェブベースでのアイデンティティ研修を行った報告をしている。

このように，アイデンティティ確立のための方

策に関する報告は多くはない。加えて、卒後の現任教育での効果的な方策においては、1件にとどまっている。看護基礎教育における報告も一貫して効果を高めるとは言い切れず、多くの現場で模索が続いているものと考えられる。今後の職業的アイデンティティ確立に向けた方策の蓄積が望まれる。

IV. 結 論

看護における職業的アイデンティティに関する文献を抽出し、理論構築、尺度開発、発達過程、関連要因、および職業的アイデンティティの確立に向けての方策について概観した。その結果、今後の課題として次のような点が明らかとなった。

1. 看護師の職業的アイデンティティに関する理論の発展
2. 既存尺度のさらなる信頼性・妥当性の確立
3. あらゆる領域の看護師や社会状況に対応した尺度の開発や因子構造の追究
4. 看護基礎教育の主流である4年制大学生の職業的アイデンティティ発達過程に関する知見が求められること
5. 看護における職業的アイデンティティの確立に向けた方策の蓄積

V. 引用文献

- 秋元典子(2011):看護の約束,ライフサポート社,東京.
- 安藤祥子,内海晃(1993):看護学生の職業的同一性,名古屋大学医療技術短期大学部紀要 5, 133-143.
- E. H. Erikson/小此木啓吾(1973):自我同一性アイデンティティとライフサイクル,1-286,誠信書房,東京.
- 藤井恭子,野々村典子,鈴木純恵,他(2002):医療系学生における職業的アイデンティティの分析,茨城県立医療大学紀要 7, 131-142.
- 古宇田英美,大黒理恵,佐藤初美(2009):早期体験実習が看護学生の職業的アイデンティティ形成に及ぼす効果,お茶の水看護学雑誌 4(1), 15-21.
- グレッグ美鈴(2002):看護師の職業的アイデンティティに関する中範囲理論の構築:看護研究 35(3), 196-204.
- グレッグ美鈴(2000):看護における1重要概念としての職業的アイデンティティ,QualityNursing6(10), 53-58.
- 秦菅(2004):看護師の職業的アイデンティティ発達過程—中間管理者に視点を当てて—,日本看護学会論文集,看護管理 35, 170-172.
- 波多野梗子,小野寺杜紀(1993):看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化,日本看護学会誌 16(4), 21-27.
- 本多陽子,落合幸子(2006):医療系大学生の進路決定プロセス尺度作成の試み—進路決定プロセスの類型と職業的アイデンティティからの検討—,茨城県立大学紀要 11, 45-54.
- 細田泰子,水野智子,新村洋未,他(2003):看護教員養成課程修了者の看護研究への取り組みと関連要因,日本看護研究学会雑誌 26(1), 137-146.
- 池田由紀子,尾崎フサ子(2009):臨床看護師の現任教育と職業的アイデンティティ形成の関連,日本看護学会論文集,看護管理 40, 240-242.
- 石橋通江,永江誠司(2006):アイデンティティ拡散状態にある看護系大学生の職業的同一性の形成過程—個人面接と電子メールを用いた教育相談の事例から—,福岡教育大学心理教育相談研究 10, 49-57.
- 和泉美枝,小松光代,西村布佐子,他(2010):A大学付属病院における看護臨床能力の実体と今後の課題,京都府立医科大学看護学科紀要 20, 11-19.
- 岩井浩一,澤田雄二,野々村典子,他(2001):看護職の職業的アイデンティティ尺度の作成,茨城県立医療大学紀要 6, 57-67.
- J. E. Marcia(1966):Development and validation of ego-identity status. Journal of personality and Social Psychology, 3(5), 551-558.
- 梶谷佳子(2004):中堅看護師の自己像への影響要因,日本看護学会論文集,看護管理 35, 179-181.
- 川守田千秋,風岡たま代(2003):看護学生の共感性と職業的同一性との関係—2年課程の学生を対象として—,神奈川県立衛生短期大学紀要

36, 7-12.

風岡たま代 (2005): 看護学生の共感性に関する一考察—職業的同一性との関係—, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要 13, 15-26.

小泉仁子 (2010): 助産師の職業的アイデンティティの発達プロセスに関する研究—助産実践を通して生じる内面的な変化に着目して—, お茶の水医学雑誌 58 (1), 13-28.

厚生労働省 (2009): 看護の質向上と確保に関する検討会 中間とりまとめ.

小藪智子, 黒田裕子, 合田友美, 他 (2007): 看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究 (第二報), 埼玉県立医療短期大学紀要 27, 25-29.

マイマイティ パリダ, 紙屋克子, 本多陽子 (2006): 臨床実習直前指導が実習への姿勢と職業的アイデンティティに及ぼす影響, 茨城県立医療大学紀要 11, 55-64.

増村美津子 (1999): 看護婦 (士) の看護技術における熟練過程, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究収録 24, 234-241.

松本真理子, 丹治光浩 (1990): 看護学生の適応に関する研究—パーソナリティおよび職業的同一性の側面を中心に—, 聖隷学園浜松衛生短期大学紀要 13, 55-64.

松下由美子, 木村周 (1993): 看護学生の職業的同一性を規定する要因の検討, 教育相談研究 31, 29-45.

松下由美子, 木村周 (1998): 新卒看護婦の職業的同一性形成とキャリア観との関連—入職オリエンテーション期における意識調査より—, 産業カウンセリング研究 2 (1), 21-27.

三野敬美, 柴田早苗, 森美春 (2007): 基礎看護学 I 実習終了後の看護大学生が持つ臨床看護師の職業に関する印象の質的検討, 日本看護学会論文集, 看護総合 38, 58-60.

森田敏子, 松宮良子, 松田好美, 他 (1996): 看護学生の自我同一性に関する研究—職業的同一性における因子構造と影響要因—, 岐阜大学医療技術短期大学部紀要 3, 1-13.

名越恵美, 掛橋千賀子 (2005): 終末期がん患者に関わる看護師の体験の意味づけ—一般病院に焦点を当てて—, 日本がん看護学会誌 19 (1),

43-49.

根岸薫, 麻原きよみ, 柳井晴夫 (2010): 「行政保健師の職業的アイデンティティ尺度の開発」と関連要因の検討, 日本公衆衛生雑誌 57 (1), 27-38.

野田貴代, 出口睦雄 (2005): 看護短期大学生の職業的アイデンティティと関連要因, 愛知きわみ看護短期大学紀要 1, 15-24.

奥山貴弘 (2007): リハビリテーション領域における看護師の職業的アイデンティティの検討: 一般病院との比較から, 埼玉県立大学紀要 9, 13-20.

小野寺杜紀, 波多野梗子 (1999): 初回臨床実習の効果—職業的同一性および対人関係価値の変化—, 日本看護科学会誌 11 (3), 103-131.

大池美也子, 松木美奈子, 東野充成 (2002): 看護学生の職業的アイデンティティ形成における保育園実習の役割, 保健医療社会学論集 13 (2), 44-54.

大谷則子 (1998): 看護管理職における職業的同一性の発達過程に関する研究, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録 23, 254-259.

落合幸子, 紙屋克子, マイマイティ パリダ, 他 (2007): 看護師の職業的アイデンティティの発達過程, 茨城県立医療大学紀要 12, 75-82.

落合幸子, 紙屋克子, 野々村典子, 他 (2003): 教師からの授業メッセージと職業的アイデンティティとの関連, 茨城県立医療大学紀要 8, 69-77.

落合幸子, 紙屋克子, マイマイティ パリダ (2006): エキスパートモデルが看護学生の職業的アイデンティティに及ぼす影響: 自己効力感・評価懸念との関連からみた効果, 茨城県立医療大学紀要 11, 71-78.

落合幸子, 柳橋正智, 百成香帆 (2010): 身体拘束の授業からみた職業的アイデンティティを育てる討論テーマの特徴, 茨城県立医療大学紀要 15, 109-118.

佐々木真紀子, 針生亨 (2006): 看護師の職業的アイデンティティ尺度 (PISN) の開発, 日本看護科学会誌 26 (1), 34-41.

関根正, 奥山隆弘 (2006): 看護師のアイデンティティに関する文献研究, 埼玉県立大学紀要 8,

145-150.

- 柴田和恵, 高橋ゆかり, 鹿村真理子 (2007): 看護学生の援助規範意識と職業的アイデンティティとの関連—臨地実習前後の比較—, 天使大学紀要 7, 85-92.
- 柴田久美子 (2000): 看護婦・士の職業的同一性に関する研究, 神奈川県立看護教育大学校看護教育研究集録 24, 234-241.
- 新谷善恵, 内田真紀, 能戸昭子, 他 (2006): 高等学校衛生看護科生の職業的同一性の形成過程, 日本看護学会誌 16 (1), 97-105.
- 下方友子, 多田貴志, 森千鶴 (2004): 看護職者の職業的アイデンティティに関わる要因, 日本看護学会論文集, 精神看護 35, 115-17.
- 高木有子, 落合幸子 (2009): 医療系大学でのピアエデュケーションが職業的アイデンティティに及ぼす影響, 茨城県立医療大学紀要 14, 99-107.
- 高橋ゆかり, 古市清美, 鹿村真理子 (2007): 患者を待たせる場面での意識に関する研究, ヘルスサイエンス研究 11 (1), 25-31.
- 竹内久美子 (2008): 新卒看護師の職業的アイデンティティ形成と職務態度—縦断的研究に基づく検討—, 目白大学健康科学研究 1, 101-109.
- 土屋八千代 (2005): 看護学生の職業的同一性地位とストレス対処行動の経年的変化, 南九州看護研究誌 3 (1), 1-10.
- 辻田大介, 入山茂美, 高橋美和 (2011): 看護学生の実習達成感と職業的アイデンティティの関連, 看護教育 52 (1), 42-46.
- 上田伊佐子, 近藤春恵, 山本美佐子, 他 (2010): 5年一貫課程の看護学生の「職業的アイデンティティ」の経年的変化と臨地実習が与える影響, 看護教育 51 (8), 702-707.
- 上山和子 (2010): 看護学生の職業的アイデンティティ形成要因と生涯発達としての子育て観—初年次学生の調査—, インターナショナル Nursing Care Research 9 (4), 79-88.
- Yamagishi M, Kobayashi T, Nakamura Y (2008): Effect of Web-based Career Identity Training for Stress Management among Japanese Nurses: A Randomized Control Trial, Journal of Occupational Health, 50 (2), 191-193.
- 山内栄子, 松本葉子, 山本雅子 (2009): 現代の看護系大学生の学生生活における職業的アイデンティティの形成過程, 日本看護学教育学会誌 18 (3), 11-24.